ねこみの
猫蓑通信

第３９号
平成十二年
（２０００）
４月１５日発行
（年４回発行）

「猫蓑今昔」異論

東　明雅

「猫蓑今昔」（「ねこみの」第三十八号所載）は、猫蓑会草創期（昭和五十六年）から今日までの会の体質（指導法・会の雰囲気・捌きなど）の変遷を大体次のように述べている。

猫蓑は草創期には、蕉風伝道の理想に燃えた師と、それに従った弟子たちの間で、すさまじい鍛錬が行われ、それに耐えきれず脱落する人も多かった。しかしその後（何年かは明らかにされてない）は、初心者に対する指導要領も整い、手を取り足を取って懇切・丁寧に教えるばかりか、捌きも一直・二直して作品を取りあげ、作者の名義まで変更してやる、まるでアメリカ婦人のキルトを刺すパーティーをしのばせるような社交団体になってしまった。

筆者の大窪瑞枝さんは草創期から今日まで猫蓑に在籍して昨年は立机して唐猫庵の庵号を持つ人であるから、記されたことは多少の不正確な点はあるが誤りではない。私は大窪さんが猫蓑をそう見ているならば、それで仕方ないと思うし、抗弁するつもりもなかったが、昔のことを何も知らないで、新しく猫蓑に入った人、また、これから入ろうとする人が、あの文章を見て失望されては気の毒だと思うので、敢て筆を執る事にした。

凡そ、物事が変化する場合には、必ずその必然的な動機があり、また、時期がある。まず、草創期に猫蓑が死物狂いだったのは、当時の連句界の情勢と深く関係している。昭和五十六年と言えば、連句協会が設立された記念すべき年であるが、そこに加盟された殆どの会は、猫蓑の志した蕉風とは全く異質のものであった。蕉風とは付けと転じを重視し具体的には自・他・場の考えを用いる方法である。これを安易に取り入れれば他の会派はそれ迄築き上げて来た自信と権威が一朝にして消滅し兼ねない事になり、必死に抵抗されたのは当然であり、猫蓑に対する風当りが強かったのも推測がつくであろう。猫蓑は死物狂いにならざるを得なかったのである。

幸い、その頃の会員にはすばらしい方が多く、積極的に援助して頂き、昭和五十八年には、「季刊連句」という雑誌を発行して広く全国の連句人にアピールできるようになった。

平成二年になって、連句は第五回国民文化祭に初めて参加を認められ、以後、毎年、猫蓑も協力して来た。最初は全国から応募された作品の中に、自・他・場を意識したものは少なかったが、年を追い回を重ねる毎に増加して、特に平成八年第十一回の井波における大会では、殆どの応募作品は、何らかの形で自・他・場を意識している迄にいたり、また、この時猫蓑勢が圧倒的に好成績を取ったのも印象的であった。

このようにして草創期から十余年かかったものの、蕉風伝道の初志はほぼ貫かれたと考えている。

そして、ちょうどこの前後から日本人の高齢化が問題になって来た。カルチャー・センターはその頃までは殆ど女性の受講者であったが、六十を過ぎた男性が次々に入って来られるようになった。その方々は殆どが一流会社を停年・退職されたのであるが、若い時から会社一筋に力めて来られただけに、仕事とともに生き甲斐を失った方が多かった。

私はかねがね、連句の三徳という事を考え、人にも宣伝している。連句をやれば長生きする。連句をやれば頭が惚けない。連句をやれば友人が多く出来る。連句が生き甲斐になるかならぬかはご当人の考え次第であろう。

そのような方に教えるのに、何で死物狂いが必要だろう。一直・二直、名義変更は芭蕉様もやっておられる事、こんなやり方がお嫌いの方はお好きな所へお移り下さい。

短歌行「六十二万石」

今宮水壺・式田和子　捌

言祝がむ花の六十二万石　今宮　水壺
四百年の春のあけぼの　浅野　史郎
紙風船よちよちの児がころがして　式田　和子
コロッケ揚がるまでのどたばた　佛渕　健悟
箒雲片割れ月をそっとはき　谷田部弓子
虫の音とだえ誰か召されし　狩野　康子
モンゴルの男に辛き角力取り　山田　史子
酒の力を借りて乗り切る　佐藤千枝子
密室の談義で決る新総理　木田真智子
新幹線で移動車座　史郎
舟唄に堤の桜咲きみちて　垂石よう子
茶髪農夫に虹のつきゆく　小石　秀子
ビニールの袋の中の染卵　田中　裕子
かなはぬことを夢といふらし　松ノ井洋子
深海を歩むがごとく閉山区　北　寿雄
役人やめて妻と向き合ふ　秋田てる子
寒の月聞いた聞こえた老夫婦　高橋玻斗子
雪の兎の耳がとけだす　伊藤　航
つつみ焼舗道にうまる貌と貌　佐々木嘉宇
父の背中の記憶はるかに　熊坂　昌子
野仏の土となるまでここに住み　千枝子
知恵売り切れて店じまひする　史子
島影をくっきり浮かし花の有り　史郎
天狗の庭にたんぽぽの絮　佐藤千賀子

平成十二年四月十日　仙台「ねぎぼうず」

三月五日、宮城県松島において、初めての「みちのく連句大会」が開催され、各地より多数の連句人が集い盛会であった。会場となった大観荘は松島湾を見晴らす場所に建ち、好天にも恵まれ、「奥の細道」に謳われる眺望を満喫できた。

大会冒頭で挨拶に立たれた宮城県知事が、「じつは私も連句をやっていたことがありまして・・」と話し出され、「趣味をジョギングとディスク・ジョッキーと言ってきましたが、これからはそれに連句も付け加えたいと思います」との言葉に、会場大いに湧いた。

今手元に「車座」という連句会の『七五三祝ひの巻』（平成四年一月）という小冊子があるが、ここに〝蜂〟という俳号で付けられているのが浅野史郎知事（以下蜂さんと呼ばせていただく）で、筆者も二度ほどご一緒させていただいたことがある。「連句をやっていたことがありまして」というのはだから本当のことである。この付合集を開くと、「時流れても俺おれらしく　蜂」という句が見える。只今の蜂さんのご心境如何に。

「みちのく連句大会」が終わって何日かしてから、大会を運営された狩野康子さんより「知事さんが連句なさりたいそうですがどうですか」とお話しがあり、早速実行ですかと少々驚いたが、今宮水壺さん式田和子さんについて、興味津々で仙台まで出かけた。

水壺さんは、連句では蜂さんのお師匠格で、東京立川にある「車座」で座を持たれている。この会は連句ばかりでなく、その名が示すようにお酒の方の研究もご熱心で、先ほどのご挨拶の中での「酒を飲みながら、夜やるのが連句だと思ってました」というのは、これも率直なご感想かと思う。狩野さんが主宰されている北杜連句塾では、主婦の方も多く昼間の活動ということもあって、実作中に飲酒などなさらぬそうである。蜂さんの連句観も変わられるのではないだろうか。

さて四月十日夜七時、仙台駅近くの居酒屋に会しての連衆は総勢二十名。三時間弱の短い時間ではあったが、手際よいお捌きで、席を分けることもなく、活き活きした付け合いが展開された。治定句はその都度、ひらめき連句会の佐藤千賀子さんが流麗に墨書され、壁に張られる進行が目を楽しませてくれた。

このような集まりをさりげなく演出される主宰の狩野さん、そしてご連衆の感性に脱帽である。

（佛渕　記）

「パソコン通信における連衆獲得の実際と実践」

日下 悟乃

インターネット流行りですが、ここではその基礎となった一世代前の「パソコン通信」のことを書いてみます。十数年前は「通信」と言えば、このパソコン通信でありました。著名な、会員数が数十万を誇るネットもありますが、ごく小さな、回線数が一から四回線のネットも数多くありました。回線が一つでも、電話を介して通信する人に時差があれば何とか形は出来るわけです。ですから、中には自分が在宅の時間帯だけ開いているものもありました。通信をやっているだけで、「ヲタク」と呼ばれた時代でした。

大抵はそんな小さな、勿論無料のネットから端を発し、クチコミ(画面上のですが)などで、「＊＊が面白いよ」などという情報を得たものでした。

連句も、そんなことがきっかけで始めたのですが、手頃な同じレベルの仲間が大勢いたほうが、楽しいし、励みになります。教室や実践の席で得た知識を復習しながら、そんな仲間作りもやってまいりました。

連句に限らず、俳句や和歌や詩をやっているグループの中で、連句に興味を持ちそうな人に声をかける(これも画面上の文字で)。また、オフ会といわれる、仲間が実際に顔を突き合わせる席などで、一行づつ感想などを書いてもらう場合はそれを五・七・五か、七・七にしてもらうことから始めます。

興味を示せば、連句のあらましを説明して、ネットで興行中の座に引き込みます。

ほとんどが、遠隔地の方が多く、出張を利用して上京した折などに当てられるため、そう多くの時間があるわけではありませんが、普段、ネットの書き込みをお互いに読んでいるため、最初から古い知己であるような間柄になれるのも、通信の利点なのでしょう。

とはいえ、実際に「座」を組んでの興行に参加出来る方ばかりではありませんので、各種のデータや書籍などを参考書として学んで頂くことになります。簡単なものはメールで送信できますが、実際の俳席に就くことも考慮すれば、最低限持って置きたい書籍もあります。「季寄せ」「連句入門」「連句辞典」は仲間内では〝三種の神器〟と呼び、これはと思う方には差し上げることにしていました。初歩の基本が理解出来たような方には、更に「芦丈翁俳諧聞書」をダメ押しに使います。私自身が、入門したての頃、先輩連衆に各種の本を頂いたのが有益であったもので、それらの資金は、麻雀などでアブク銭が手に入ったものを活用していますが、肝心のこれらの著書が、昨今絶版等で入手し難くなったのが悩みなのです。

《短句拝見》

銘を胡蝶と付しさかづき　芭蕉

（「めづらしや」の巻）

金子兜太氏は、季語の豊潤を味得することを「私は〈しゃぶる〉といういい方をしている」（「現代俳句歳時記」チクマ秀版社）と言っているが、季語という骨のズイをしゃぶるようで実感がある。

濃密に集積された季語体験を駆使し競い合うことも又、俳句の舞台の活力になっているが、「季語が活きていない」、「季語の斡旋がよろしい」など、一句を力あるものにするためには季語に内蔵されるコード（本情）に習熟することが求められる。

そういう点では、掲句のような作例は、物足りないような、肩すかしのような、約束に従って季語を入れただけのような感想をもたれる方があるかも知れない。だが数多く続く連句の場合、濃厚な思い入れの句だけではどうにも暑苦しいことになり、さらさら感を生むためのこうした季語の〝記号的用法〟は、一句で完結する俳句の場合と事情が異なるように思う。ここだけを捉えて、連句をすると俳句がヘタになると言われてもこまるわけであるが、しかし、〝記号的用法〟と安易な季語使用とは紙一重と言っていいのかもしれない。

（ほ）

初懐紙

歌仙「石の蛙」　東　明雅　捌

初懐紙石の蛙も這ひ出でよ　明雅
二十日正月賑はへる庵　淑代
水灌菜白き厨に洗ふらん　文子
小鳥の卵温める膝　珠枝
玉盤の霞の谷に落ちてゆく　クリス
漸く着きしラストランナー　雅
ボストンの訛りになれぬ正教授　代
君の笑顔が僕のよろこび　文
いつどこに居ても気になる碧き瞳よ　枝
鯨の泳ぐ後を追ふ船　ス
フランシスコシャビエル祭が天草に　雅
少年の手が握る麦飯　代
猩々緋壁掛を織る杼を運び　文
窓にくっきり弓張の月　枝
やや寒の横笛の音響きくる　ス
露繁き野に玉探す人　雅
楊貴妃てふ名を持つ花のほころびて　代
城に登れば笑ふ山々　文
こそこそと招かれぬ客仔猫抱き　枝
デイケア厭ひ父の冗談　ス
男同士裸になってビール乾し　雅
墨を吐きだす江戸前の蛸　代
大芝居野郎好者傾き者　文
ゲイ・ニューハーフ・ガングロのギャル　枝
あこがれる娘の日記我に似て　ス
盆燈籠に偲ぶ面影　雅
雨上り仰げば月と天の川　代
だめ横綱に淋し秋場所　文
ひこ孫も加へ百人大家族　枝
蛇皮線ひいて舞踊たのしく　代
サミットの島に無医村学者村　文
リターンアドレスCの字の欠け　代
失業の嵐に吹き廻さるる身か　雅
自転車こげばついてくる蝶　代
天下一の花は三春の滝桜　雅
臍みかん入れ弁当の籠　文

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　浅賀淑代　橘文子　花巻珠枝
近藤クリス

歌仙「福笑ひ」　青木　秀樹　捌

千年紀穏かに明け福笑ひ　秀樹
門で賑やか若き獅子舞　和子
鳶の声春の潮に岩濡れて　やすこ
土筆摘んだと見せに駆け寄る　ゑみこ
懸賞の当たりのはがき朧月　さえこ
色鉛筆でぼかすイラスト　和
古丹波の釉の青みに惚れた人　ゑ
作務衣姿のしなやかな腰　や
嬢はんはどんがめなどとなぶり好き　和
氷小豆を匙で食べさせ　ゑ
裏山がいつの間にやらなくなって　や
高級マンション誰が住むのか　さ
三本の薄で足れり今日の月　や
根岸界隈歩く糸瓜忌　ゑ
オバタリアン誘ひ合せて美術展　さ
あっちこっちと指をさす癖　や
枝垂れ咲く花に短冊背伸びして　和
もろこあぶりてちょっと升酒　さ
借りてきた猫のいぢける春疾風　ゑ
勉強嫌ひバイク少年　や
才能はゆっくり開くシュバイツァー　同
私いささか生き過ぎたかも　和
白足袋の五枚鞋がややきつく　ゑ
目病み女の風邪の恋しき　和
熱い息受けてうれしき箱枕　や
利子の計算全部暗算　ゑ
ダイオキシンうっかり燃せぬ燃えるゴミ　樹
ペルージャ去りて中田ローマへ　同
尖塔に月影仰ぐ諸霊祭　和
紅葉かつ散る庭にひっそり　や
母の煮し蜂の子うれし街暮らし　ゑ
自動ピアノに合はすハミング　や
旅プラン前後にめくる時刻表　和
夢を見ませう老夫婦でも　樹
石仏の頭にちょんと花の屑　さ
蝶々とまれよのどかな昼

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　式田和子　池田やすこ　吉村ゑみこ
難波さえこ

歌仙「初凪や」　上月　淳子　捌

初凪や七里七浜鳶の笛　淳子
船起しする漁夫の賑ひ　あかり
菓子作り俄か講師におさまりて　健悟
Eメールにて知らす近況　安子
歩道橋ふと人影の絶えて月　冬乃
乳母車行く黄落のなか　順子
ロザリオ祭声おごそかに神父様　乃
投げたブーケは誰が受けたの　安
流れゆく雲に横顔探しをり　悟
平和の碑茫々として　乃
悪友としめし合はせるおいちょかぶ　悟
スーパーもする銀行経営　り
秋近き月を上げたり五番街　順
道路掠めて飛べる蝙蝠　安
たっぷりと煮てふるさとのだんご汁　順
今も四股名のままで呼ばれる　悟
御衣黄のほのかに紅き花の蘂　り
観光ガイド春泥を踏み　乃
うらうらと小坊主どものボール蹴り　悟
懸賞小説やっと書き上げ　順
足音の夢か現か階登る　り
雪隠の穴すべて塞がれ　悟
明けぬれば寝酒こぼるる夜具の中　順
君の名胸に凧を聴く　乃
悔はなし祖国も親も裏切って　悟
戦禍は続くゴラン高原　乃
粉ミルクやっと届きて眠る嬰　り
屋上に立ち観覧車見る　同
鉾杉の秀を渡る月永平寺　安
三十里来て虫の交換　悟
両の手で胡桃くるくる廻しつつ　安
ミレー集めし美術館あり　り
中高年登山ファッション極めつき　乃
犬の散歩は僕のお仕事　安
石畳祢宜の袴に花の散り　淳
絵凧字凧の上がる大空　安

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　中田あかり　佛渕健悟　神谷安子
百武冬乃　和田順子

歌仙「初懐紙」　島村　暁巳　捌

はしけやし鬚の恩師と初懐紙　暁巳
ミレニアムとて酌み交す屠蘇　久美子
和布刈舟吃水深く戻り来て　達子
ぶらんこ漕いで上げる歓声　時子
新入生迎ふ分校昼の月　かりん
長針廻し脚立片付け　巳
旧き佳き長崎語り直木賞　ん
高嶺の花の鼈甲の櫛　久
篠持ちし狂女我視る能舞台　時
金魚に彼の名をつけてみる　久
調教師ダービー迫りぴりぴりと　達
渋滞中にかかるケイタイ　時
隧道を抜ければ月の真正面　達
泡立草はもう見飽きたり　久
芋煮会いつもの顔が鍋奉行　巳
賽銭箱は小銭ばっかり　時
花びらが阿吽の獅子に散込んで　久
休耕田に降りし晩霜　ん
自自公ののたりのたりとうららかに　久
袖振りはらひ通ふ競輪　時
濡れそぼる鉄骨現場人気無く　達
ビタミンピンク流行る被災地　ん
毛糸編む山手線をふた回り　達
あな珍しや残り燕が　久
タスマニア妻子共々住みついて　同
インターネットにそれぞれのアミ　久
触れさはり確かめてみる浮気虫　巳
煙草くすぶる胸もくすぶる　達
月渡る一揆のかざす筵旗　時
勝栗喰へと婆が割込む　達
秋祭新町長の腕冴えて　ん
調髪料は微香系なり　巳
からくりの人形の舞ふ夢の中　時
短編小説腹案の成る　達
花の里一筆書きで巡りみん　巳
すっくと立ちし斑野の富士　ん

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　副島久美子　篠原達子　梶井時子
登坂かりん

歌仙「鞠初」　松本碧捌

人垣や糺の森の鞠初　碧
せせらぎの音届く楪　清子
椀に盛る摩蛤ほのと口あけて　蓉子
春と大きく幼児の筆　道子
雛の市そぞろに行けば昇る月　政志
テーブルクロス新しくする　壽子
連綿と蘆丈明雅のミレニアム　道
伊達を気取りて髭立てる男　清
かへりやんせわたしの胸は大福よ　蓉
土用波寄せ洗ふ乱礁　壽
ほととぎす遠峰楯のごと並び　清
ヘリポート発つ緊急出動　志
月明り天保小判堀り当てし　蓉
葡萄酒醸す甕のくろぐろ　清
芸術祭受賞シニアの頑張りで　道
自然に減らす体脂肪率　志
花の下巣箱たびたび覗かるる　壽
親の想ひの届くうららか　道
軟東風に母屋改築竣工す　志
牧羊犬の走る裏庭　清
クオーヴァデス　チェチェン難民どこへ行く　蓉
アンネの日記またページ繰る　清
檻楼市に国語読本一揃ひ　蓉
おむすびころりん新海苔で巻き　壽
連れ立ちて古墳をめぐる女子大生　清
巨き手のひと夫に選びて　志
失恋の痛みは砂に埋め隠し　蓉
新撰組の法度厳しき　清
湖のきらめきやまず月渉る　壽
茶漬けに添へし浅漬け大根　清
おくんちの龍の踊に酔ひ痴れて　蓉
厚顔を消す山姥メイク　清
人生は茫々浮沈さまざまに　志
籤の売場にいつも寄る癖　碧
源氏絵の花は小袖に縫ひ取られ　壽
香りすみれの紫の鉢　壽

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　下鉢清子　五味蓉子　加藤道子
峯田政志　杉山壽子

歌仙「夢の字」　山口美恵捌

床の間に大き夢の字初懐紙　美恵
淑気ゆかしく炷ける名香　孝子
スキーヤー山肌遠く列なして　郁子
ラップ音楽ヘッドホンから　代々子
胸にある一つの決意月明し　慎二
革装画集めくるやや寒　郁
港町猫と木椅子に散る銀杏　孝
金髪茶髪肩を寄せ合ひ　郁
マシュマロの指のゑくぼに口づけし　代
団扇のかげでべっかんこする　孝
外債の値が跳ね上がる夏の月　同
五百羅漢の伏しつ転びつ　二
密造酒醸す馬なき厩跡　郁
声塩辛く魚を競るなり　孝
鮮やかに刺子木綿の紺と白　代
十四年ぶり母校優勝　二
龍天に放ちて花のミレニアム　孝
ロボット家事をこなす永い日　代
赤道を越え友と行く旅のどか　郁
太鼓で知らす人の生き死　孝
老教授憑依世界に迷ひ込み　二
ビスクドールと深く契りし　代
けふもまたかくし男にいたぶられ　二
時雨が濡らす坪庭の苔　孝
荒崎に万羽の鶴の争はず　郁
模擬試験なり自転車で行く　孝
唾が飛ぶ説教なれどうとうとと　代
山の清水はとてもヘルシー　孝
月の出に作る名物きりたんぽ　郁
蓑虫肩に触るる軒先　代
秋もはや日本語に馴れ伝道師　孝
御伽話にひそむ哀しさ　代
介護保険何がどうしてどうなるの　二
この頃とみに多きど忘れ　郁
つと寄りてしつけ抜かるる花衣　恵
キャラクター凧舞ひ舞ひて空　代

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　坂本孝子　東郁子　橋野代々子
鈴木慎二

歌仙「初御空」　市野沢弘子　捌

龍の字の凧上りゆく初御空　弘子
獅子舞を追ふにぎやかな声　昌子
大鍋に手のべのパスタ茹であげて　和代
ハーブの香りほのとただよひ　一恵
遊歩道まっすぐ続く三日の月　ゆみを
赤い羽根つけすれちがひゆく　代
風爐名残お正客には恩師つき　恵
組まれし見合ひ乗ったふりして　昌
マイカーにピアスの彼を待たせをり　恵
ぬっと飛び出すブチの野良猫　代
杢太郎の海鳴り近く仰ぐ富士　同
夕月の中浴衣取りこむ　恵
怪談の夏狂言も大詰めに　代
松は松なり竹は竹なる　を
アンダンテカンタービレの曲にのり　同
サーになったるショーン・コネリー　昌
花守の育てし樹々の咲きそめし　代
刺身のつまは紫蘇の芽がよき　恵
復活祭籠いっぱいの染卵　代
やっと判った朱鷺は雄とか　恵
解明が進む恐さのヒトゲノム　昌
宝くじ買ひ一等の夢　恵
八目鰻またも出したる古女房　代
忘れられたる雪の妾宅　を
ほればれと秘蔵のパイプ磨きゐて　恵
海外取材単身でゆき　昌
打ちあげの宴に地酒をとり揃へ　代
竹針で聞くSPの盤　昌
最終のレトロなバスが月を浴び　同
慣れた手つきで簾外せり　恵
相撲甚句うはってうしに唄ふ癖　を
ずらりと並ぶぽっくりの靴　恵
レントゲン義足包帯車椅子　同
名代豆腐屋家業継ぎたる　代
巣箱にも入るる番号花の下　弘
ボートレースのオールそろひて　恵

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　中野昌子　長崎和代　山崎一恵
青島ゆみを

歌仙「千年を」　大窪瑞枝　捌

千年を知らぬ傀儡廻し初む　瑞枝
とんどの炎届く中天　泉子
弦月にダウンコートの衿立てて　麻子
ソナタ形式曲を着想　英子
流行の華奢な自転車予約待ち　千寿子
鰭ゆるやかに泳ぐ琉金　泉
離れ島岬へつなぐ虹の橋　麻
ロマンチックなメール誰から　千
「ご夫婦？」と間違へられる嬉しさよ　泉
ちょっとむせんで乾した水割り　麻
和やかに大使主催のレセプション　泉
ＯＤＡは予算削減　千
仏跡の風化も著く月照らし　英
木の実拾ひつ遊ぶ童　麻
よき瓢見れば目のなき瓢爺　千
ドクターストップ何につけても　英
ご城下は爛漫の花七曲り　麻
逸勢の書に積る春塵　英
難の客有職故実きりもなく　枝
当てにはしない銀行の利子　麻
答弁はシナリオ通り記者会見　泉
野生のゴリラ絶滅の危機　千
鞭と飴巧みに使ふ調教師　泉
夫となれば家事も覚えて　千
女優賞賭けて濡れ場の体当り　枝
紫煙くゆらす羅宇が斬新　英
スキーの座スノウボードに奪はれて　千
釧路湿原群るる凍鶴　英
月皎々一子相伝剣の家　泉
時代祭の輿かきに出る　麻
ジーンズの裾につけ来る牛膝　泉
ボランティアーへ誘ひ合ふ声　麻
震災の街は見事に蘇り　英
ひとつ乗り越す風光る駅　泉
化身かと見れば紛るる花吹雪　枝
鐘の供養は豆腐絹ごし　英

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　青木泉子　内田麻子　佐古英子
紺野千寿子

歌仙「雨降れば」　蒲原 志げ子 捌

雨降れば雨に和むや初懐紙　志げ子
雀かたまる庭の福藁　佳之子
新社員寮の子犬になつかれて　嫋
ブーツを汚す春泥の道　美津
寄り集ひ又げらげらと朧月　水壺
卵焼きにも裏表あり　之
いとさんの人待ち顔の淀屋橋　津
身八つ口から鳴りしケータイ　嫋
せはしさよヒモとジゴロを操って　壺
一言居士の和尚夏痩　嫋
素裸好きで娘に嫌はれる　之
コンチクショーを訳すサンキュー　津
月高しマチュピチュの丘風吹きて　之
捕はれ人の何思ひ草　壺
帰るさのどんぐり独楽はねんごろに　嫋
ポストはみ出す広告の嵩　津
花透かし天艶やかに見ゆる刻　同
山の笑へば我も笑はむ　壺
囀りのもとでお代はりカップ酒　之
工事現場の監督は留守　げ
藪医者も何故か見破る塩加減　嫋
閻魔様へは知らぬ存ぜぬ　之
掛け取りの首横に振り縦に振り　壺
日記始めは意気のいい事　津
ダイエットするぞとスポーツジム通ひ　之
後腐れなき程の睦言　嫋
亭主とは違ふ胸毛をくすぐって　之
燃える燃えないごみの選別　壺
海釣りの月光浴びる蒼の人　嫋
過ぎし戦を偲ぶうそ寒　壺
笹琵琶で『流泉』を弾く秋の翳　津
夢にまで見し直木賞とる　嫋
偽札は二重鞄でフリーパス　之
死んだふりする猿の振舞ひ　壺
飛花落花名残の花にひれ伏して　げ
龍の字凧を揚げる砂浜　嫋

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　染谷佳之子　八代嫋　桑原美津
今宮水壺

歌仙「二〇〇〇年」　倉本 路子 捌

二〇〇〇年寿ぐ屠蘇を酌みにけり　路子
あけはなちたる窓に初富士　紀子
北海の流氷やがて動くらん　志世子
心ときめくけふの春場所　澄子
巣立鳥翔び立ちゆきぬ暁の月　有子
双眼鏡のレンズきらきら　紀
大佛の銹色とくと見定めて　澄
お使ひをやる小町横町　紀
マウンテンバイク並べて初デイト　有
炭は跳ねるは頬はほてるは　紀
木枯しに綾の鼓の鳴りもせず　世
タイムマシーンにゴーのひと声　紀
未来の夢描きし児童美術展　有
青い大きい月に象さん　世
秋惜しみ上総井戸掘ナミビアへ　紀
国も齢も越えて酒盛　世
西郷どんの目ン玉をむく花の山　澄
鳩の糞さへ浴びるのどらか　紀
師へみやげ乗込鯛をぶらさげて　世
埋蔵金かも小判一枚　澄
鬼どもに瘤を取られて泣いた真似　紀
「科学の手品」流行るこの頃　有
ががんぼは障子の桟に足をかけ　世
舶来香水選ぶ坊さん　路
ふたありで制御不能になりたいわ　有
臨界に来て心中の沙汰　紀
抽出につっかへてゐる鍵の束　世
キッチンテーブルがたがたの脚　有
月皎々吾を離れる吾の在り　紀
誰にみせばや軒のたまのを　澄
築場ではのらりくらりと落鰻　路
畦にかがまる爺さまの背　世
惣菜は百円均一味もよく　澄
チャイナドレスを時々は着て　世
花万朶留学生に職決まる　路
れみふぁそらしど風光る空　澄

平成十二年一月十九日　江東区芭蕉記念館
連衆　椿紀子　秋山志世子　八角澄子
佐々木有子

連句拾遺

大窪　瑞枝

印刷された連句作品を読むことに余り熱心になれないのは私だけでしょうか。すばらしい作品を鑑賞するのは確かに高尚な趣味には違いないのですが、何だか済んでしまった試合のビデオやらスコアの分析をしているように感じるのは、やはり私の連句に対する姿勢に胡乱なものがあるからでしょうか。こういう分析的研究をネグるから勝負強くならないんでしょうか。でも言わせてもらいたい。大リーグの試合をテレビで見るよりも、草野球でもいい、自分で打ったり走ったりしたい。真っ白な懐紙の上に一句一句治定されていく丁々発止の現場に居合わせて、作品世界の展開に身を委ねて苦吟闘吟する。それこそ連句の醍醐味ではありませんか。芭蕉もおっしゃっている。間髪を入れぬ反応こそ連句の生命であると。懐紙が文台の上にある間だけが勝負であると。芭蕉の言葉を自分の都合のいいように援用してはいけません。でも芥川龍之介も三冊子のそのくだりを殆ど剣術でも教えるような気ぐみだと評していますから。

では文台を去った反故に芭蕉もなさった執拗な校合とは何なのか？　私は音楽の演奏と録音のような関係ではないかと思っています。音楽家にとって音楽とは即生演奏、レコードは大量販売の缶詰です。生演奏には不測の雑音やハプニングやその辻褄合わせやら軌道修正がつきもので、演奏者も聴衆も手をとってそのスリリングな時間を泳ぎ切って行くところに喜びがあるのです。でも記録者には記録者の美意識にその曲のあるべき姿があり、それが微妙に編集に影響し、遅速強弱、切ったりつないだり、いわゆる鉋目がつるつるにとれて最後には見事な一巻のＣＤになるわけです。ＣＤにはＣＤの有用性と楽しみ方がありますが、音楽する楽しみとは別の心の働きだと思います。芭蕉は座に於いてアドリブの利いた鋭い演奏者であると同時に、気難しい録音技師だったということでしょうか。

「連句は座の文芸である」なんてよく括られていますね。座の文芸とは、そもそも形容矛盾ではないかと思うのは、近代自我主義の文学理論とやらに毒されているせいでしょうか。

大岡信流に言えば人間が座を組んでするのは祭祀であり宴であり、文芸とはその対局である孤心に属するものではないか。確かに芭蕉の彫心鏤骨の校合の結果である諸作品は、ひたすら風雅のまことを責める芭蕉の孤心以外の何物でもないと思われます。

しかしそれと芭蕉が己の俳句より優るとの腕前を自負した連句力とは別なものではないでしょうか。活字になった連句、特に芭蕉のような巨星の跡を見れば連句即文芸という混同があっても当然です。では私達が今風に言うなら結構はまって年中一座して親しんでいる連句が孤心でしょうか。ひょっとしたら「座」興でしょうか。

祭や宴には歌舞音曲や演武相撲などつきものですが、連句が「座」に属する以上、連句の本質は文を使った技、剣技や演技に類する文技とでも言うべきものではないか。

この文技の楽しさはなかなかのもので、私は火焚きの翁どころか、人類は語彙の持ち合わせ百にも満たない頃から既に言葉遊びの衝動に脳髄をくすぐられていたと思います。

文技は芭蕉の誇る精妙な付句の応酬の技でもあり、一方寄席の大喜利、ものは付、回文、何何とかけて何と解くと言ったもの一切も含むのです。連句はいきなり文芸というにはまことに不安定な、脆い、堕落しやすいジャンルというべきでしょう。現在だってフランス風大喜利だのバーチャルものは付けだのが連句の名で闊歩してませんか。

ここに蓮の糸で繋がった三十六枚の絵があります。この絵が連句という凧になって揚がるのには気骨という骨を張り、風韻という風を受けねばなりません。この気骨に当たるのが東明雅先生の示された世態人情諷交詩の理念かと思います。そして風韻は？

奇論、暴論ついにまとまりませんでした。たかが連句、だから連句。

英語連句の試み　花鳥風月（十三）

浅賀　淑代

房総

風光る卵の黄味の濃くなりて　　明雅

（『猫蓑庵発句集』より）

春。野も街も景色は明るく、目映く、風もまさに光って感じられます。とりわけ初春のころの風の躍動には心ときめきます。「風光る」が季語として初めて立てられたのは、山本健吉によれば、延享二年（一七四五）の『俳諧手挑灯』だそうですが、春風を視覚的に捉えたこの近代的な季語は、現代の日本人に馴染みある季語のひとつと言えるでしょう。では、英語ではどうでしょうか。手元のW・J・ヒギンソンの『国際歳時記』には相当する語が見あたりません。そこで、訳語をthe wind shines, the wind sparkles, the wind is bright‥ 等、考えてみましたが、さて「キゴ」となり得るでしょうか。

卵。その白い殻に詰まった新しい生命。不思議な力。イースターエッグを引き合いに出すまでもなく、卵は春と再生のシンボルとされてきました。「卵」の輝きと「風光る」のもつ躍動は相通じるものを感じさせますね。春と卵の句をもう一句ご紹介しましょう。

The shape of an egg
on the morning tablecloth ——
the approach of spring　　Koko

（朝の卓卵のかたち春きざす　　耕子）

（"A Hidden Pond（『隠沼』）" より）

さて、一昨年春にスタートした二十韻「ねこの子」は、ナオの折端まで進みました。

ナオ5　食堂に過去の女ら嫉妬の目　ニール

（across the restaurant/ former lover's / jealous looks　Niel）

6　ビクトリア・ピーク肩も寄せずに　瑛子

（shoulders not touching / Victoria Peak　Eiko）

今回は名残のウラの折立。登坂かりんさんの付けと英訳の試みの中から「夜話」の句。

ナウ1　夜話は第二次世界対戦史　かりん

（winter night —— a history of the Second World War was told　Karin）

前句のVictoria Peakは映画「慕情」の舞台となった丘。そこから連想は戦争へ。今は昔を語る人へと転じました。「夜話」は冬の季語。現代の都会暮らしにも、よき時代の冬の生活の記憶を呼び覚ます季語ですが、英語では、訳例のようにwinter等を補わないと冬の季感が得られないと言えそうです。

ではナウ2。日本語句の英訳だけでなく、最初から英語で発想された付句もどうぞ。

＊連句と酒＊

「からすみ」　　今宮　水壺

今年の正月、長崎の親戚から〈からすみ〉が送ってきました。

山本健吉編の歳時記には、長崎の沖で取れるボラの卵巣から作ったものが最高級などと書いてあります。

終戦後私がまだ長崎にいたころ、小学校の元校長という方が父を訪ねて来られ、ささやかな酒盛りが始まりました。肴にからすみも少々。

元校長曰く「晩酌の折、盃にからすみを一切れ入れて酒を注ぐ。酒を干しからすみはそのままにしてまた酒を注ぐ。溶けてしまうまで続けます」。

この話をふと思い出して、物は試しと、からすみをほんのちょっぴり盃に入れてみました。底に沈めたまま、正月特例の四合程をゆっくり飲みましたが、からすみは元のまま。溶けない。

元校長という人が嘘をつくとも思えませんが、これは酒好きが晩酌の量を増やすための一策だったのかも・・。

§ 案内 §

○ 猫蓑同人会　場所　清澄庭園
　　日時　六月二十一日（水）
　　十一時～五時

○ 猫蓑会　場所　江東区芭蕉記念館
　　日時　七月十九日　正午
　　総会の後歌仙興行

○「猫蓑作品集 X」が出来上がりました。
　〒二七七　柏市加賀二―十二―十一
　　一〇〇五一　梅田利子　宛

◎ 次の方々は猫蓑会同人に推挙されました。
　島村　暁巳　和田　順子
　秋山志世子　日高　玲

浅野欣也著『癒しの連句会』を読んで

日高　英二

待ち兼ねの恋ならぬ待ち兼ねの書物が遂にでた。著者は俳号黍穂としてご存じの方も多いと思うが、精神科医であると同時に連句人で、しかもすでに二十年近く連句を精神障害の治療に利用し、また障害者と健常者が無差別に参加する「癒しの連句会」の創設と発展に協力され、連句のもつ不思議な「癒しの力」を広く経験されてきた方である。その成果はこれまで専門書の中で「連句療法」として発表され、講演会でもその一端が述べられてきたものだが、この度はそれらに一般の理解も視野に入れた視点から一冊にまとめられたのがこの本である。

連句の「癒しの力」とはなんだろう？

著者は、その力のもとはキーワード的にいうならば「付合の心」と「座の構造」の中にあるという。付合という精神作業は、「付くといふ筋は、匂・響・悌・移り・推量など、形なき所より起こる所なり。心通ぜざれば及びがたき所なり」（三冊子）と芭蕉のいうごとく、一方では誰にでもでき、かつ心の底から唆られるものである。人の心はこの魅力の磁場にまるで鉄粉のように吸い寄せられる。その心的メカニズムの全体はきわめて複雑なもので簡単に分析できるものではないが、著者のさまざまな観察を私なりに勝手に要約させてもらうならば、その魅力の中核には「他者と通じ合い、他人の楽しみを楽しみとする」喜びの中にあると見られる。唯識仏教の言葉を借りるならば、「信」の心所も働くと言えるかもしれない。

さらにこの付合の心は付合を越えて座の中にまで溢れ、そこに信頼と共生の空気が漂う独特な人間関係を生み出すものだが、著者はこのことを捉えて「座の構造」と呼ぶ。

この二つのことが連句の「癒しの力」の核となるものである。しかしこの力は精神的疾患のこれこれの原因にしかじかに働くといったものではなく、もっと深いところで生命の流れそのものに修復的に関与するものらしい。連句をやるとわれわれ健常者も気分が健やかになるのを感じるのが、それはまさに同じ力のプロセスを享けているからに違いない。

連句療法による治癒例の幾つかが四章までに紹介されているので、われわれ素人にも連句の治癒力の実像に接近することができる。

第五章は近来の連句ブームと現代社会の病弊を関連づけて考察した文明論的試論、第六章は深川隠棲から「冬の日」の蕉風確立までの芭蕉を自己実現の過程として捉えた病跡学的小論、いずれもこの著書ならではのユニークな考察がちりばめられていて、まことに興味つきない。

（『癒しの連句会』日本評論社　¥1800）

質問コーナー

東　明雅

【Q】 連句が初めての人に取って、向き合う捌きという存在に戸惑う向きもあるようです。捌きとはどういうものなのでしょうか。

【A】 連句になぜ捌きが必要かという疑問は、野球になぜ監督というものが必要かという疑問とよく似ています。連句と野球、それは余りにもかけ離れていると思う方もあるでしょうが、一方は集団でやる文芸であり、他方は集団で闘うスポーツという点に類似点があります。

連句は連中の出した句をすべて吟味して、式目に外れていないものの中から、打越・前句との転じ・付味の最もすぐれたものを選んで、次の付句として治定します。そしてこのことを歌仙ならば三十数回繰り返すことによって、一巻は首尾するのです。しかも、その選んだ一句は捌きの考えにより、自由に添削をして、極端な場合には、作者の名義を変更することも許される場合があります。これを行うのが捌きなのですが、何故、そんな権限が捌きに許されるのでしょうか。それは連句というものが集団の芸術であり、そのことが一座の個人それぞれの著作権に優先すると認められているからであります。

民主主義の時代、ことに自我意識の強い方には納得が行かぬところかも知れませんが、もし、捌きに一句も添削を許さぬという事になったら、いかがでしょうか。捌きなしの一座、添削なしの作品が出来たら、それは奇蹟というべきでありましょう。

野球の方も、全選手の中から九名を選んで出場者を決め、投手が不調であると見れば直ちに交替させ、三振ばかり続ける場合には代打を出し、時にはスクイズを命じ、球団が勝利を得る為には、あらゆる事を考えて、あらゆる命令を独断で下す。これが野球の監督というものであります。選手の中にはそのような采配に不平・不満を持つ人はいっぱい居ると思うのですが、皆それをじっと胸に納めているのは、いかに現代が民主主義の時代、個性尊重の時代であれ、野球・蹴球のような集団競技においては、選手個人の利害・都合よりも、集団の利害・都合が優先して当然だという社会通念が徹底しているからでありましょう。

連句の初心者の中、もし捌きの存在に戸惑い、疑問に思っている方で、私の以上の説明に納得されない方は、集団競技である野球で名を成し得なかったジャンボ尾崎が、個人競技のゴルフに移って大成したように、即刻集団の文芸(座の文芸)である連句から去って、個人の文芸である俳句の方へ転進される事をおすすめ致します。それも連句に深入りされぬうち、早ければ早いほどよいと考えております。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。

一万八千円　天の川連句会東京支部
一万円　篠原達子
十万円　根津芙紗　（敬称略）

◇ 基金の口座　富士銀行新宿西口支店
普通３３７６０４５　猫蓑基金

§　§

あとがき

○ 三月二十六日、千駄ヶ谷の日本青年館で芦丈翁の三十三回忌が修せられた。この偉大な俳諧師には、伊那の明るく広い空と仙丈ケ岳の偉容が重なる。

雲よ霞と六十余年の花乞食　芦丈

○ 猫蓑会にも、悟乃さん鶴鳴さんを中心に、ホームページが誕生します。乞うご期待。

季刊　「ねこみの通信」第三十九号
発行者　猫蓑連句会
編集人　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
〒一九五―〇〇七二
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ